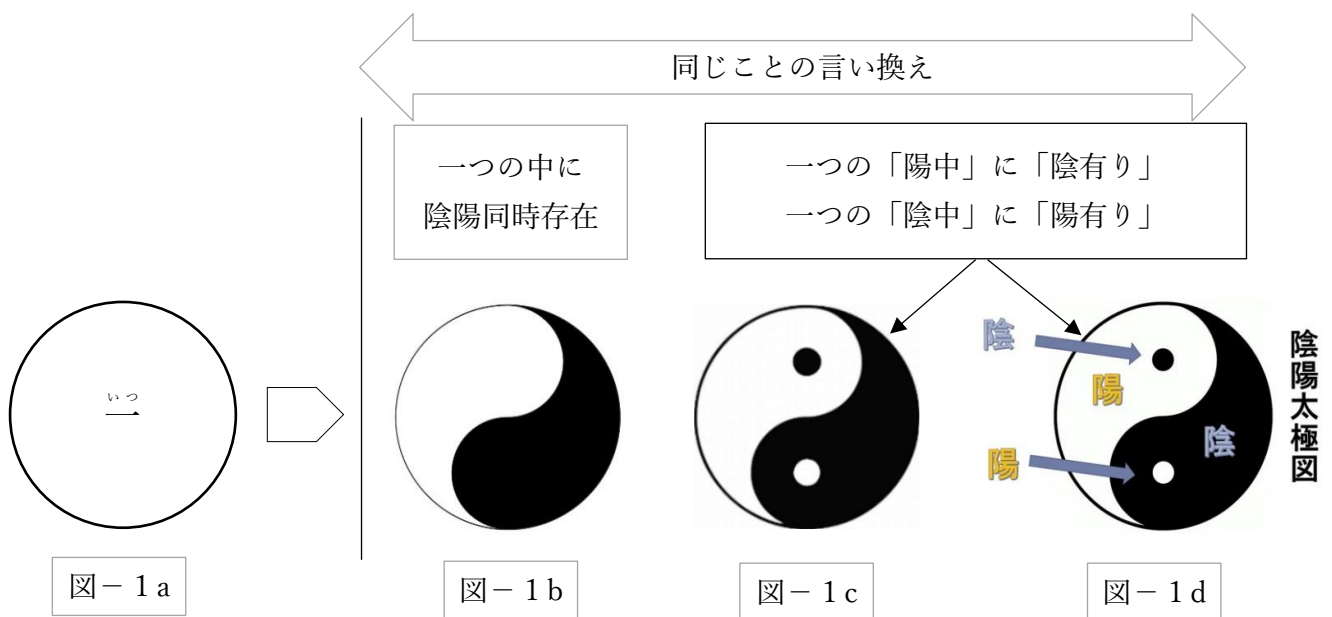


万物創成の宇宙原理は老莊思想に曰く「道は一に始まるも、一にしては生ぜず。故に分かれて『陰』『陽』と為り、陰陽和合して万物を生ず。故に曰く、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰気を背負い陽気を胸に抱き、この二つを媒介する^{ちゅうき} 沖気によって調和を為している。」とされる。

「一は二を生じ」の「一」は図-1 a、「二」は森羅万象に内在する陰陽二元相對（待）性自然原理を意味し、図-1 bのとおりに図化するが、「陰陽魚眼太極図」と言われる。概念のスタート基点、万物未発未分の状態、すなわち何もかもが“一つ（全一的）”になっている「無・空・中」は混沌・混然一体（一=ひとつ）から、初めに、『陰と陽』が生まれたとする考え方。これが人間の知識となる「分ける、分けた」——「分別知」の始まりの概念である。

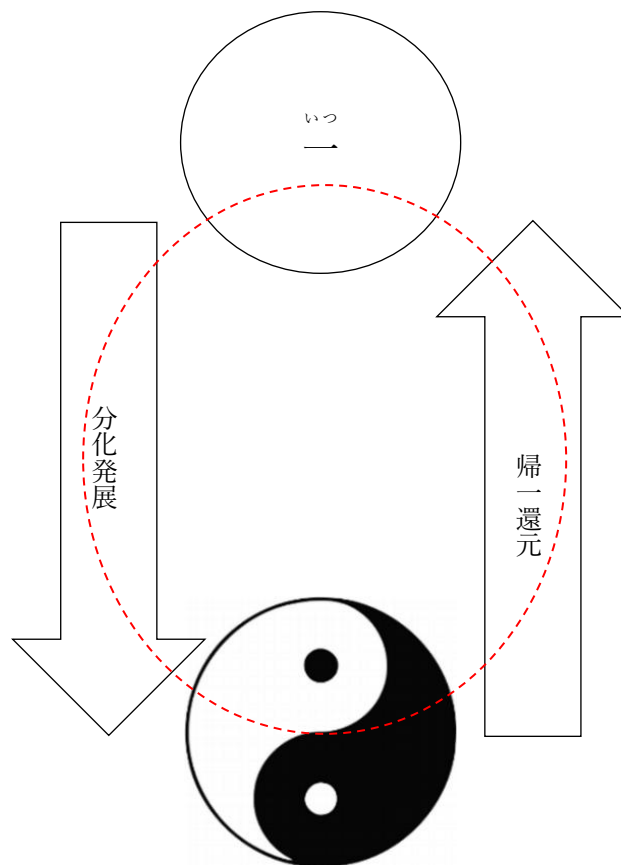
ここで、大前提があり、『陰』『陽』は「黒と白」で表示するが、大小・強弱・優劣の差異は一切無く、同じ価値とする。「分別知」の起動力・トリガー・発動力となる二元を象徴的に表現するための記号である。 言い換えると、「分別知」の起動力・トリガー・発動力を象徴的に表現するための記号として二元を設定したものである。「一」も何もかものスタート基点の記号である。

一つの「もの・こと」の中で、白は対極の黒を喰って、黒は対極の白を喰う。陣取り合戦で白黒どちらが優勢・優位になるのかは勝手気まま、流動的である。善悪同居、矛盾・対立・葛藤を同時内包している。端的に「陽中陰有り、陰中陽有り」という。時に吸引、時に反発。喰い合う様相は人間の心も同様。このような認識から考え方の調和と心の安定が図られるのだ。これらに撞着・蒙昧するようではまだまだ心を鍛錬すべし。

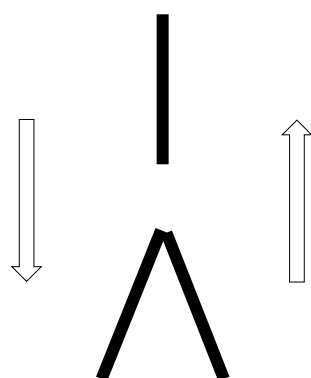


この宇宙における陰陽二元要素・対抗因子について分類・配当したものを属性毎に事例として図(表)-2に整理した。

(対象)	二元要素	
—	全一	
二元	陰	陽
宇宙	地	天
性	女	男
正負	負	正
状態	凹	凸
始終の音	吽	阿
天体	太陰（月）	太陽（日）
面	裏	表
倫理	邪	正
動体力	求心力	遠心力
曼荼羅	胎藏界	金剛界
自転	夜	昼
慣性	静	動
判定	偽 false	真 true
．．．	．．．	．．．
図(表)－2		



図(表)－3



図－4

言い方を変えると、図－4のとおり、一を開いたものが二（二は一を開いたもの）、逆に二を閉じたものが一（一は二を閉じたもの）という。すなわち、一は二を有する（内包する）とも言える。

陰陽の質的特徴は図(表)－5のとおり、健全な正面を主と成し、必ず病的な裏面を従とする。その上で、「もの・こと」に対しては図(表)－3のとおり^{きゅういつ}の分化発展と求一還元の眼識を、複眼同時照射を心掛けている。ただ、とかく陽は自然拡張・自然増殖・自己培養の精気を持ち旺盛なことから、私は陰の健全な^{きゅういつ}求一還元作用を強く意識している。 **同表における病的な裏面は、左記、健全性に隠れ潜む副作用・阻害因子・障害種子である。**

陰陽説は、「一極（全一）二元論」とも言われ、言い換えれば「陰陽同根万物同体」（同根＝一つ）の、すなわち、両性具有の思想哲学である。陰陽の原初は「一つ、一(いつ)」である、正と反が同根・同時進行なのだ、よって「一つ」そのものには、もちろん陰陽の色付けはないことは明々白々なことである。宇宙の森羅万象の一つの「もの・こと」の動静に作用と反作用が同時に生じている。世の中の万事について、地球上大人 60 億人が寄って集って最高^{たか}の知恵を結集して出し切った結論（判断）と雖も「唯一絶対」という「もの・こと」はない、なぜならば、「人間も陰陽同根に付き対極の種子を有すもの、陽中陰有り・陰中陽有り、万物流転」だからである。陰陽粒子の入れ子状態になっているのだ。

人間の心に着目すると、例えば今日の午前中は全部「陽」、午後は全部「陰」だなどということは絶対^{N o n}に無いのだ。今この瞬間が「陰陽二元の壮絶なせめぎ合い」をしているのだ、要するに感情はコロコロ

健全な正面	病的な裏面	
陽の特徴は、 <u>分化発展作用、創造発現の力</u> である、人間の想像力・生命力に活動性（エネルギー）を注入せしめる働きである。いわば個性重視を希求する胎動である。	しかし他方で、細分化・尖端化・末梢化、混乱の危惧が生じ、これが過ぎれば対立葛藤や弱肉強食等の暴力性を生む危険を伴う。	「マンキタゲ倭奸根性」
陰の特徴は、 <u>求一還元（帰順合一）作用、統一潜蔵の力</u> である。真理・根源に含蓄統一しようとする働きから敬愛・尊貴・尊厳に憧れる理想精神を育む働きである。いわば平等重視を希求する胎動である。	しかし他方で、慎重・静観・消極化、硬直の危惧が生じ、これが過ぎれば萎靡沈滞や発展阻害を生む危険を伴う。	

図(表)－5

口変わるではないか、こんなことは自身の胸に手を当てれば自明の理である。

したがって、世に何かを主張して「俺の信念は固い、俺は振れない」などと豪語する人（特に政治家と称するペテン師群）がいるが、真っ赤な嘘吐きである、そんな主張といえども一過性でありそんなことは維持出来るものではない。

また、時々「マンキタゲ倭奸根性」の言葉を出す、——簡単に言うと自分は努力せずして、相手を蹴落とす策略を以って相対的に自分が優位に立とうとする性格をいう。——図(表)－4のと通りの陰陽特徴の病的な側面を指すものである。

世の森羅万象「もの・こと」の一つを取り出せば、総てに黒と白、一長一短、表裏、すなわち陰陽二元の両面を持つ、同時並立することになる。どちらが露見・表出するかはその時の環境の蠢き、条件次第である。しかし、一方が有体化したからといって他方が消滅した訳ではない。他方は一時無体化し裏に回っただけである、有体化の気を窺っているのだ。攻守・主客が一時入れ替わっただけである。このように「陰・陽」は、冒頭に記述したとおり、大小・強弱・優劣の差異は一切無く、同じ価値とし、二元を象徴的に表現するための記号であるということの理である。したがって、「陽」が先立てば同時に「陰」が後立ち、「陰」が先立てば同時に「陽」が後立ちするのである。世に言う賛否の同時並立である。「俺がオレ我」と意固地になって自分の主張を正当化しようが、固定的な普遍性を持ち得ないことを明らかにする天地の理法である。

(end)